

ペールダウン
時計少女の廻り道

1.

グリザリカにて

novels

佐藤真登

『導力…接続（条件・了）——不正定着・純粹概念【時】——解除【回帰…記憶・魂・精神】
「……ん」

満天の星が輝く空の下。取り戻した記憶に、アカリは身を起こした。

夜だというのに、うつすらと影ができている。空には輝く砂を敷き詰めているかのように多くの星が輝いている。日本では——少なくともアカリが住んでいた都会では見ることができない夜空だ。

記憶を取り戻すと、毎回、その直後に少し混乱してしまう。ここはどこだと、自分の記憶を探ると、すぐにつじつまが合った。

「ああ……そっか。砂漠に入る前、かな」

頭を押さえて、ふわあつとあくびをする。就寝していたこともあって、メノウが付けてくれた花飾りがあしらわれたカチューシャは外してある。

いまは港町のリベールを出て、さらに国内を移動して次の未開拓領域にさしかかったところだ。メノウは傍にいない。危険な生物や魔導兵がいないか哨戒に出ているのだ。

アカリは自分の記憶の封印にいくつか条件を付けている。普段は【世界回帰】で経験した記憶を【回帰】の魔導で封印しているが、周りにメノウがおらず、いままで繰り返し返した時間軸と明確に違う出来事に遭遇した場合、アカリは一時的に記憶を取り戻すことにしている。

世界ごと回帰する条件は、たった一つ。メノウが死亡することだ。

メノウの死亡をアカリが認識した時点で、世界の【時】を回帰させている。させている、というよりも、【時】の純粹概念がアカリの願望をかなえるために、自動的に発動してしまうのだ。アカリの目的はメノウに自分を殺させることだ。より正確に言えば、メノウが処刑人としての任務を遂行してアカリを殺し、彼女を生き延びさせることである。

メノウは、アカリの目の前で何度も死んでいる。

まるで、それが運命だと言わんばかりに、何度も、何度も、何度もだ。

「……」

いままでのメノウの死を思い出して、アカリはきゅつと下唇を噛む。

グリザリカの王城でメノウと出会ってから、聖地にたどり着くまで、三か月あまり。

その期間アカリがメノウと一緒に旅をすると、アカリに情を移してしまったメノウは、処刑対象であるアカリを殺せなくなってしまう。それどころか禁忌であるアカリを助けるためにメノウが行動して——彼女の師匠にして史上最多の禁忌狩り『陽炎』に殺害されることになる。

「本当に騙されたまま一緒に旅をすると……メノウちゃん、わたしのことを助けちゃうんだもん」

それが、最初の旅の結末。聖地にたどり着き、『塩の剣』まで至りながらもメノウがアカリを助けようとして、導師『陽炎』に殺されてしまった、忘れようにも忘れられない思い出だ。

特にメノウが第一身分を裏切ってもアカリを助けると決意してしまった場合、赤黒い髪的神官『陽炎』が現れる。処刑人の背信は禁忌だと告げてメノウを殺しに来る彼女から逃れられなことは、一度もない。

ならばメノウと出会うのがそもそも悪いのだと、アカリは召喚された直後にグリザリカの王城を脱出したこともあった。その時に至っては、アカリが一人で逃けている間にメノウが古都ガラムで大司教オーウェルに捕らえられて死亡してしまうという事態となった。

アカリとともに旅をすることでメノウが背信者となって導師『陽炎』に殺されてしまう結末が待っているのに、アカリがいなければメノウが難局を乗り切れずに死亡してしまう事件が複数あるのだ。

アカリがいることで引き起こされるメノウの死の要因と、アカリがいらないことでメノウが助

かることになる要因。二つの要素が複雑怪奇に絡まって、アカリが幾度も繰り返しながらもメノウを助けられない結末をもたらしている。

何度も同じ時間を回帰させた結果、最初のなにも知らなかった頃の自分がメノウに同行した旅が、もつとも長い時間メノウと一緒にいられた。同時にアカリを殺せる刃——『塩の剣』に一番近づけた旅でもあった。

だからアカリは、自分の記憶を【時】の純粹概念で封印している。それでいて記憶を封印した自分にメノウへの好感度と既視感を残しているのは、彼女から怪しまれるためだ。

アカリが【時】の純粹概念で時間のループを繰り返していることをメノウが悟れば、彼女は警戒心を失わないままアカリに接するようになる。

その警戒心があれば、メノウがアカリに完全に情を移しきることはないはずだ。アカリを殺せるままの心で聖地にたどり着き、メノウは第一^{フアウスト}身分を裏切ることなく純粹概念すら討滅可能な『塩の剣』を振るうことができる。

そうすれば、メノウが死ぬ要因は消えてなくなる。

メノウに死をもたらす幾多の事件を切り抜けて、最後にアカリを助けられないことで、メノウの人生は続く。

「だから、ちゃんとわたしを殺してね、メノウちゃん」

いまの自分になる前の最初の自分は、どんなのだったのか。

アカリはそつと目を閉じて、まだ残る記憶を回想した。

*

グリザリカ王国、王都。

町はずれの教会から町の中心地へと、少女といえる年頃の神官が歩いていった。

処刑人の神官、メノウである。

グリザリカ王国は大陸東部に位置する、国家の中でも最大級の大国だ。多くの人が住まう街並みは、夜中でも絶えることのない導力光に満ちている。彼女が藍色の神官服を着ているということもあって、怪しむ視線は皆無だ。通行人の視線が集まっているのは、彼女の美しさゆえである。

大通りを一人で歩いていたらメノウは、ふっと肩を落とす。

「モモとはぐれちゃったわね」

いまは異世界人である黒髪の少女をグリザリカ王城から連れ出した、翌日の夜だ。本来なら今日のうちに王都を出てしまうつもりだったのだが、トラブルがあり列車に乗り損ねてしまったのだ。

モモはメノウが乗り損ねた列車に乗車していたため、先にガラムに向かう流れになった。教典による導力通信につながる距離でもないため、連絡もつかない。モモのバックアップは望めない状況だ。

メノウが一人であるというだけなら、グリザリカ国内で孤立しようとなんの問題もない。彼女は処刑人として様々な訓練を受けている。どのような場所にしようとも、単独行動は可能だ。だが、いまのメノウは一人ではない。

連れの顔を思い出し、憂い気な表情になる。昨日の夜に接触した連れこそがメノウの不安要素そのものだ。

不安をあらわにしたのは、つかの間のことだった。メノウはすぐに表情を平静なものにする。大通りを曲がり、路地裏にある宿に到着する。いつもメノウが一人で使うものより、ワンランクは上げてある。

メノウが部屋の扉をノックすると、中で人の動く気配がした。
がちやり、と扉を開く。

「お、おかえり、なさい」

扉を開いたのは、少し癖つ毛気味の黒髪の少女だ。彼女は小動物のようなおどおどした態度でメノウを迎える。

「あの……列車に乗れなくて、ごめんね。わたしのせい、だよね」

「気にしないでいいのよ」

相手を安心させるための笑顔を浮かべたメノウは、申し訳なさそうにしている彼女の名前を呼ぶ。

「ね、アカリ」

トキトウ・アカリ。

無害に見える目の前の少女こそが、処刑人であるメノウがグリザリカ王国を訪れることになった原因だ。異世界である日本から召喚された『迷い人』にして、純粹概念を魂に宿すことになった少女は、禁忌を狩る処刑人のメノウにとつて排除する対象である。

実際、メノウは王城で接触した時に一度、アカリを殺している。だが【時】の純粹概念を魂に宿していた彼女を殺しきることができなかった。

彼女は死亡すると同時に【回帰】の魔導で蘇るといふ、殺しても死なない力を持っていたのだ。彼女の力を目の当たりにしたメノウは予定を変更してアカリを王城から連れ出し、拠点にしていた魔教会で一泊。この国の第一身分を治める立場のオーウェル大司教に連絡を入れた。知見ある彼女から、どのような純粹概念でも滅することができるといふ話を聞くことができたため、古都ガラムへの移動を決めた。

だが翌日、異世界に来たばかりで動転するアカリが出立の準備にまごついたため、古都ガラム

ムに向かう列車に乗り損ねてしまった。

「あなたのことを考慮できなかった私が悪いの」

「そんなこと、ないよ。えっと……」

心なしか身を縮めた少女が、上目遣いになる。戸惑いとためらいを見せながらも、アカリが口を開いた。

「メノウさん、でいいんだよね」

「ええ、もつと気軽に呼んでくれてもいいのよ。年も近いし、『メノウちゃん』とかどうかしら？」

「……うう」

メノウが微笑みかけるが、アカリは逆に居心地を悪そうに肩を縮こまらせる。

人見知りなのか、メノウに対する困惑が感じられる。まだ出会ったばかりの他人を警戒しているのもそうだが、どう接すればいいのかわからないといった様子だ。いま名前を呼んだ声も、そわそわと落ち着きのないものだった。

しかし、いきなり異世界召喚なんていう事態に直面した少女の反応だと思えば不審なものではない。寄り辺のない世界に強制的に喚び出されて、初対面の人間に連れまわされているのだ。いくら友好的に接したとはいえ、そんな状況でいきなり心を開かれたらメノウのほうが警戒してしまう。

死なない純粹概念への対処法は、この国の大司教であるオーウェルから伝えられていた。アカリとは、古都ガラムにあるという儀式場に連れて行くまでの数日の付き合いになる。禁忌の魔導を魂に宿す処刑対象とはいえ怪しまれないように友好的に接する必要があると、メノウは意識してフランクな台詞を続ける。

「シャワーを浴びて、寝ましようか。どう？ 一緒に浴びる？」

「へ!? だ、大丈夫……だよ!」

いたずらっぽく告げると、アカリは顔を真っ赤にしてシャワー室に駆け込んだ。

少しして、シャワーの音がしはじめる。緊張を解くための冗談だったのだが、予想以上に初々しい反応だ。メノウは微笑してから、自分のやっていることを客観視して口元をゆがめる。

「……あんないい子でも」

殺さなければならぬ。

異世界人は、やがて純粹概念を暴走させる運命だ。召喚の際に魂に宿るあの力は、『迷い人』の意思に関係なく記憶を蝕み、精神を侵食する。

あの少女はこの世界の誰かに利用される前に殺さなければ、多くの被害を生む。

この国でも人災ヒューマン・エラーという悲劇を回避するために、メノウはすでに一人の少年を殺している。アカリと一緒に召喚された【無】の純粹概念を魂に宿した彼のことを、メノウは名前を聞くこともせずに殺害した。

身勝手に召喚されて、わが身かわいさで殺される。人為的ではなく、自然現象としてこの国を訪れる真の意味での『迷い人』もいるが、どちらにしても処刑対象なのは変わらない。

彼ら、彼女らをメノウが殺すのは、徹頭徹尾この世界の人間の都合なのだ。

「やっぱり……私は、どうしようもない悪人ね」

メノウは自分の役目の息苦しさに、重い息を吐いた。

「……ふう」

この国で行われた禁忌、異世界召喚の対処に来た処刑人『陽炎フレアの後継』との導力通信を切ったオーウェルは、重く息を吐いた。

テロリストに狙わせた列車に、『陽炎』の弟子は乗らなかった。グリザリカ王城から連れ出

した『迷人』の少女が原因で予定をずらし、明朝に出発する列車に乗るのだという。

当然、彼女がガラムに到着する日程も変化することになる。

「さて、どうしましょうかねえ……」

立て続けに起こった計画外の事態に、オーウエルはゆっくりと思索に沈む。

オーウエルはすでに七十も半ばの老婆だ。年老いた思考に、かつての鋭敏さと果敢さはない。節々に巢食う痛みが、常に精神を蝕み、あらゆる感覚を鈍化させている。

七十年を超す彼女の人生は晩年を迎えている。老いたという自覚は、とつくの昔に悲観から諦観に変わっている。力も、知恵も、勇気も、すべてが全盛期には及ばない。

「あの子の予定がズレたことには、どんな意味があるかしら」

目下の思考は、そこに絞られている。

オーウエルは、メノウに『異世界人を抹殺するための儀式場がある』と誘いをかけて罫を張った。それは半分真実であり、半分は嘘だ。オーウエルの擁する【漂白】の魔導陣を使えば、どのような純粹概念を持つ異世界人であれども、魂を塗りつぶすことができる。

だが、【時】の純粹概念をただ死亡させるような真似はしない。なにせ【回帰】の魔導を行ってできるというのだ。

時間をさかのぼる魔導となれば、いまのオーウエルにとっては喉から手が出るほどに欲しい魔導である。

「私が裏で糸を引いて、第二^{ノブレス}身分に異世界人を召喚させて、テロリストに列車を襲撃させたのが見抜かれている……というのは、穿ちすぎね」

だからこそ慎重に策略を巡らせるのだ。テロリストに列車を襲わせたのは、ガラムに向かってくるというアーシユナの意識をオーウエルから逸らしたかったからだ。本来ならば列車テロを起こした『第四^{フォーミュ}』の対処をメノ

ウたちとアーシユナの両方にやらせることで、アーシユナに処刑人という存在がいることを気付かせて、そちらに意識を向かせたかった。

メノウの出発がズレたことでその企みは空振りに終わったものの、いま頃テロリストたちが蜂起しているはずの列車に『陽炎』の弟子が乗り損ねたのは、偶然の可能性が高い。そう結論を出す。

「……」

オーウエルは受け取った情報を自分の計画に組み込むために、深く考えを巡らせる。失った若さの代わりに蓄積された経験が、泡沫のように頭の中ではじて消えていく。オーウエルの七十年以上の人生で、こうすればこうなつたという実体験が思考の手間を簡略化し、結論を早めてくれる。

自然と保守的になり、時として思い込みにつながる危険性もある思考手段だが、オーウエルは主観と客観を切り分ける天眼がある。

『第四』のテロリストたちの手引き、原罪魔導のための生贄集め、その他もろもろ。『陽炎』の弟子が、オーウエルが手に染めている禁忌の全貌を掴んでいたとしたら、単独でオーウエルの庭である古都ガラムに足を踏み入れようとすることはないはずだ。

大司教であるオーウエルが禁忌に堕ちていると気が付けば、弟子ではなく、必ず『陽炎』本人がくる。

弟子を捨て駒にして油断を誘うというのはいかにも『陽炎』がやりそうな手ではあるが、芸がない。あの『陽炎』ならば、そもそもオーウエルに気取らせるような手を打つはずがない。誰にも知られることのないまま、オーウエルの心臓に刃を突き刺す手段を取る。

ならばやはり『陽炎の後継』がオーウエルの企みを一つ回避したのは偶然なのだろう。

「でも、偶然と幸運ほど怖いものはないわ」

瑞々しさが洒れ、しわばかりが目立つようになった指で、こつこつと杖の頭を叩く。

彼女は偶然と幸運を過小評価しない。どちらも、人が成功するには必須のものだからだ。逆をいえば、強者が転落する時は決まって不運に見舞われる。

この世界に不慣れた異世界人を連れていたのだ。『陽炎』の弟子が優秀だとはいえ、予定通りに行動できないこともあるだろう。組み立てたスケジュール通りにこなせる者が優秀なのではなく、不慮に対応できる者がそれが処刑人として優れているのだ。

その観点から見れば、メノウは非常に優秀だ。

イレギュラーな問題を受け止めて対処し、報告も怠らない。この国に入ってから彼女の行動は、部下に持ちたいとオーウェルが感嘆するほど優れていた。

優秀すぎて、処刑人としての怖さがまったく見えないほどに。

「畏には、とてもかけやすそう。『陽炎』と比べるまでもなく素直だわ。けれども……」
それでも、オーウェルのたくらみが一つ、外された。

たかが列車の乗車のズレ。対応すれば修正可能な範囲だが、すでに一手がずれてしまったのも事実だ。慎重に慎重を重ねて悪いことはない。

魔導素材としてたぐいまれなる価値を持つ『陽炎の後継』と【時】の純粹概念は惜しい。二つが揃えば、オーウェルの悲願の一つは成就するのだ。

老いを克服して、己の全盛期を取り戻す。

グリザリカ王への餌として釣り上げた異世界人は、理想的な純粹概念を持っていた。

あまりにも都合が良すぎて、一つの不安要素で自心が働くほどに。

もしもいま見えているメノウの素直さが計略だとするのならば、彼女はオーウェルの策略を見抜いている恐れすらある。

純粹概念を持つ異世界人を捕え、人格を漂白し、魔導制御の媒介として必要不可欠なメノウ

をも取り込むことで純粹概念を振るうという目的を。

「どれだけ若くても、あれは『陽炎の後継』なのよね」

メノウのことをここまで警戒するのは、彼女が『陽炎の後継』と呼ばれているからだ。オーウエルはほかの誰よりも『陽炎』の動きに用心していた。

この国はオーウエルの庭だ。オーウエルを禁忌と見抜いたところで、告発する先すら存在しない。

万全を調べたという自負が慢心へと変わり、隙になつていたのかもしれない。

「年甲斐もなく、目がくらんでいたわね」

己に語りかけて、自戒する。

今回の異世界召喚において、オーウエルの最大の目的はグリザリカという国そのものだ。第二身分の権威失墜のためグリザリカ王を異端審問にかけて公に裁かせることが計画の肝であり、異世界人は最初から切り捨てつもりだった。

国王が異端審問官に裁かれたことで、すでにオーウエルの企みは成功している。ならば残りの要素は、事のついででしかない。『陽炎の後継』も【時】の純粹概念も、望外の幸運ではあるが執着するべきではない。

「あまり、欲をかくものではないわね」

大陸西端にある聖地からもつとも離れているため、『主』の影響力が低いという立地。グリザリカという古代文明期から千年続く血族。東部未開拓領域『絡繰り世』と接しているという地理。これらが揃えば、第一身分の干渉を受け付けない完全独立国家を打ち立てることも可能だ。

若さを取り戻すのは、そのあとでいい。まだ自分の寿命は、十年は確実に続く。若返りはずいぶん、数年前から生命の維持には成功していた。

ならば、やはりメノウとアカリの確保に関しては、うまくいけばいい程度にとどめるべきだ

ろう。

「殿下の動きは……そうね。第二身分ノブレスに見てもらいましょうか」

結論は出た。

オーウェルはまとめた考えを実行するために、部下を呼んで人を動かす準備を始めた。

古都ガラムに到着したアーシユナ・グリザリカは、旧王城の騎士詰め所で不貞腐れていた。

「あまりお気に病まれますな、アーシユナ殿下」

「……気にするなというのが、無理な話だ」

いつもは豪放磊落なアーシユナらしくもなく、ぶすりとした返答だった。

アーシユナはテロリストが蜂起した王都発ガラム行き列車の列車に乗り合わせていながら、衝突事故を止めることができなかつた。

〈続く〉

*本文は制作中につき、変更になる可能性があります